

世の終わりのための五重奏  
山口泉

z u m i y a m a g u c h i



## 著者紹介

1955年 長野県に生まれる

東京芸術大学美術学部中退

1977年 「夜よ、天使を受胎せよ」で第13回太宰治賞優秀作受賞

著 書 『吹雪の星の子どもたち』(径書房—1984年)

『旅する人びとの国』(筑摩書房—1984年)

『星屑のオペラ』(径書房—1985年)

the BUNGEI TREASURY

## 世の終わりのための五重奏

---

1987年 5月1日 初版印刷

1987年 5月8日 初版発行

著 者 山口 泉

---

発行者 清水 勝

発 行 所 株式会社 河出書房新社

151 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2 振替東京 0-10802

電話 03-404-1201 (営業) 03-408-8611 (編集)

---

\*落丁本・乱丁本はお取替いたします。 大日本印刷・加藤製本

\*定価はカバー・帯に表示してあります。

© 1987 Printed in Japan

ISBN4-309-71058-1

世の終わりのための五重奏

装幀・戸田ツトム  
装画・山口 泉

《世の終わりのための四重奏》への  
九つのヴォカリーズ（一九八六）

——“Quatour pour la fin du temps” (Olivier Messiaen) の標題と成立事情とにちなみ、世界および人類の全的破滅に関する若干の考察をふくむ、幾葉かの素描とそれらへの補註、およびときとして前後に添附されるごく少量の私的なメモと、いかなる形式をもたない詩とからなる短篇小説

《K—C》という記号によって表わされた、一つの希望に。

……今世紀のフランスを代表する作曲家の一人、オリヴィエ・メシアン(Olivier Messiaen, 1908—)は、第二次大戦中、ドイツ軍に捕えられて、ドイツとポーランドとの国境、シレジア地方・ゲルリッツ(北緯五十一度)の捕虜収容所に収容されていた。彼の唯一の室内楽作品『世の終わりのための四重奏曲(Quatour pour la fin du temps)』が制作、初演されたのは、この、飢えと強制労働と零下三十度の厳寒のなかでのことである。演奏時間——約四十二分五十秒(コロムビア・OW-7576-MU盤による)。楽器編成——ヴァイオリン、クラリネット(変ロ)、チェロ、ピアノ。この特異な編成は、それぞれの楽器の演奏家が、偶然、捕虜として同じ収容所に居合わせたという事情に由来している。……

——音楽之友社版『名曲解説事典』『メシアン』の項の記載の一部を、小説『世の終わりのための五重奏』の作者・山口泉が、主観的な判断にもとづいて改変した。原執筆者ならびに関係者に、ここで御諒解と御許諾を乞う。

《私の俘虜時代に想を起し、書きあげられた『世の終わりのための四重奏曲』は、一九四一年一月十五日、第8A俘虜収容所で初演された。それはシレジア地方のゲルリッツで、耐え難い寒さのなかで行なわれた。収容所は雪に埋もれていた。私たち俘虜は三〇〇〇〇人いたが、その大部分はフランス人で、残りはポーランド人とベルギー人であった。四人の器楽奏者はこわれた楽器を使って演奏した。エチエンヌ・パスキエのチェロには三本の弦しかなく、私のピアノの右手のキーは、そのいくつかが沈んだきり、もう再び上がらなかつた。私たちの衣裳は珍妙であつた。私はひどくボロボロになつた緑色の上衣を変なふうに着せられ、しかも木靴をはいていた。聴衆は司祭、医者、プチ・ブルジョア、職業軍人、労働者、農民というふうに社会各層の人びとが集まつてきていた。……》

——オリヴィエ・メシアン（コロムビア・OS-3471盤ライナー・ノートより。訳者末詳）

## 小説『世の終わりのための五重奏』——内容

I 山口泉による、まえがき

II 山口泉によつて設定された、この作品の草稿の所蔵者・海野電子の談話

III 海野電子によつて提供された、それら——五種類の、色も手ざわりも異つた紙葉に書かれた錯綜したテキストを校訂し、可能なかぎり、一篇の完成された小説にちかい形式

にまで復元した《禁作家・西埜森夫復権著作集》刊行委員会による、緒言および凡例

IV 禁作家・西埜森夫自身が、すべての紙葉類の収められた紙挟みの外側の砂色の布地に誌していた、2 B ないしは 3 B あるいはそれ以上の濃く柔らかな鉛筆による、ごく短い覚えがき

V 小説『世の終わりのための五重奏』

I 山口泉による、まえがき

《K—C》よ。

この作品の劈頭、あなたへの献辞のなかで、私はあなたのことを「一つの希望」であると規定した。だが、それが果たして精確な定義であつたのかどうか——実は、いまもって判断をくだしかねている部分があることを、私はここで早くも告白しておかなければならない。

いかにも、それは——そう誌した私の言葉は、たとえば明らかな誤りではなかつたにせよ、またむろんのこと意識的な虚偽でもなかつたにせよ——しかも、完全な真実とは……それだけでは、ただそのみでは、必ずしも呼ぶことのできない言いかただつたのではないだろうか。あえて公正を期そうとするなら、私はあなたを——疑いもなく巨大な希望であると同時に、またそれと厳密に等価の……すなわち圧倒的な絶望の根拠へと反転しうる可能性をも、つねに秘めた存在であると考えているということになるのかもしれない。圧倒的な絶望？それは、誰においての？——おそらくは、単に私ひとりのみにとどまらない、少なくとも私を通じて認識された世界一般と人間のすべて、私にとつての世界と人間の総体においての

——それは絶望なのだ。

いや、誤解しないでほしい。……というよりも——承知しておいてほしい。なぜなら、私があなたに関して「絶望」という言葉を口にするとき、それは百億分の一にも千兆分の一にも、ただ単にその絶望があくまで絶望的な絶望にすぎないことによって用いられたわけではないのだから。あなたに出会ったことの意味、あなたを見つめつづけることの意味は、私自身の生と世界との関係の遮断性をたえまなく確認しなければならぬような地点に立会わされつづけるという作業を通じ、むしろ私自身に——私自身の苦しみや絶望として、周到に還元されてきた。

それにしても、なぜ——？ それほどまでにあなたは、私において意味をもつのか……。だが、その問いに対してだったら、私はたやすく答えることができる（ような気がする）。

私は、あなたと、あなたにつながるものたちとに出会ったことにより、世界の手ざわりを知った。それまで私が呼吸し、歩みつづけてきた領域とはまったくその輝度と彩りとを異にした、いわば生命の論理において照らしだされ、祝福された世界——もしもすべての人間が、決してたやすくはないにせよ、少なくとも何らかの意志と持続的な努力のすえに、希求のすえに——そこに到りつくことができるのなら、もはやそれを嫌忌し、否定し、それに敵対しなければならぬ理由は、さすがのこの私からも失われてしまうような——。

その試みに、私は賭けた。

他のどんな言葉を用いた置換えも妥当ではなく、ただこの簡潔な単語によつて表わすしかない、あなたの勇氣。色彩をもたない焰のような、あなたの勇氣——。精神の高さ、豊かさ、若わかしさが絶えまなく放射されつづける磁場であるような……温度のない水が陽に透かされて閃き、その弾けとぶ彼方で、何か永遠に華やいだものの笑い声が木霊しているような——明朗さ。そして、大半の人びとによつて見逃されがちな——しかし、それに会いたいと願うものの触れかた次第では、柔らかな苔にふくまれた露のように掌いっぱいに滲みでてくる、あなたの優しさ……。

たしかに、この世界には私が愛しうるもの、私が愛するに値するもの、それを愛しつづけるために自分が生きるに値するものが、実在したのだ。それによつて愛されることが、私自身の意味を決定づけるような種類の力を秘めたものが——。

その力に、私は賭けた。

すると、世界は答えたのだ。私以外のありとあらゆるものの総体としての人類、その社会——あなたをさえも、いわば私にとつて効力をもつ唯一の人質として確保し、その奥深く監禁した制度、人類史という形式において規定されている世界が……その卑しく愚かで強大な手ざわりで、私の臉を閉ざそうとしながら答えた。

“汝ノ要求ヲ、却下スル”と――。

それは、わかつていたことだ。なぜなら……

なぜなら、もしも私のこの要求が世界によつて、人類史によつて、たやすく受け容れられるようなものであったのだとしたら……私たちは、自分たちが所屬しているとされるこの“人間”という範疇を、いまよりはもう少し確かな――それについて論議したり、それを想像したりすることが、さほどの羞恥の感情を伴わずにできるようなものと思ひ立てゐたにちがいないのだから。私たちは、日日の朝焼けの緑とバラ色とに染まつた雲を、いまよりははるかに……はるかに、美しいと思うことができたにちがいないのだから。

あなたも知つてのとおり、やがては何らかの形を与えられるにちがいはなかつたこの作品は、しかし私を襲つた諸諸の苛酷な事情により、思いがけない期間をその生成の時と定められた。このことの良否を問うに足るだけの材料を、目下のところ、私は持ちあわせてはいない。

ただ、この作品がいつ書かれることになつたにせよ、その際に私が恩恵を受けるであろう点には変わりがなかつた幾たりかの人びとに、いま謝意を表することには、あなたもおそらく賛成してくれるだろう。

小説の題名の由来となつた音楽作品の資料の入手に関しては、この分野の専門家である畏

友、W・S嬢のひとかたならぬ厚誼に負うところが大きい。

ほかに、他のさまざまな機会に私がその名を挙げて礼を述べてきたすべての方がた——友人K・Nとその妻K・N、A・U、《T・R・C》という記号によつて表わされた一つの場に集うK・K、M・Aらをはじめ、その内部と周縁部の友人たち、まだごく若く美しい少女M、その祖母で《生》に対してつねに朗らかに関与しようとするK・M氏……そして、私が傷つけ、裏切つた夥しい人びとのことを可能なかぎり思い起こしながら、その最も基調をなすモチーフが過去五年あまりにわたつて構想されていたこの作品は、その後の状況の変化に要請された止むを得ない改稿部分を除き、一九八五年から一九八六年にかけての真冬、十四日間で書きあげられた。

それでは、小説を——始めよう。

## II 山口泉によつて設定された、この作品の草稿の所蔵者・海野電子の談話

……なるほど。つまり、あなたがたは、なぜ私がいまになつてこの小説の原稿を公表しようと考えてうになつたか——そのわけをお知りになりたいとおっしゃるんですね。たしかに、それを預つて三十四年も経つてから、まるで思いだしたみたいに今さら、実はこんなも

のがあるんです”といって作品のことをお話した私のやり方は、皆さんからすれば、ずいぶん変てこなふうに見えるかもしれません。……ええ、私の今回のやり方を“売名行為”とか非難している馬鹿な連中のいることは、私自身、ちゃんと承知しています。別に私には、いままさら“売名”をしなきゃならない理由なんて、なんにもないのにね（笑）。

ただ、これだけは――。せっかくのインタヴューなんですから、この場を通じてはつきりと申し上げておきたい点があります。それは、今回、私がこの小説――用紙のうちの一枚の右肩に、鉛筆で小さく題名が書きこまれてはいるものの、迂闊に読めば全体が一つの作品として構想されたものであるってことさえ判らない小説の原稿を出版社に引渡したのは、先日……なんとかいう別の作品の綴りを“発見”して、それをすぐに、皆さん――ジャーナリズムの方がたに連絡した宇森深冬さんの場合とは、まったく……全然、事情が違うって言うことです。

あらかじめ、お断りしますが、あの宇森深冬さんという女性個人については、私はいま何ひとつコメントを加える気持ちはありません。あなたがたジャーナリズムの人びとが、西埜森夫と私との関係についてあれこれ穿鑿し、当然の結果として宇森さんと私とを、何か特殊な意味あいであげつらおうとされることは、いかにも一種の職業的な習性とよべるかもしれませんけど――。あなたがたの関心っていうのは、大抵の場合、その程度の水準のものにすぎないわけですからね。

宇森さんには宇森さんの立場があり、もちろん私には私なりのそれがあります。私は、世間がいま一般に理解している西埜と宇森さんとの関係を、やはりそのようなものとして考えているし——あえていうなら、私にとつてそれはどうでもいいことなのです。

そう、一つだけ——先日、宇森さんのケースと今回の私の場合とのあいだの明瞭な違いについて、指摘しておきましょう。というのは、宇森さんはあくまで、あのなんとかつていう別の遺作の「発見者」であり、西埜が亡くなったあと、その原稿と長いあいだともに生活していながらその存在を知らなかったのに対し——私は生前の西埜から、はっきりとこの作品の原稿を委託され、何百回となく読みかえし、守ってきた「所蔵者」であるということです。

それ以前に、私に原稿類のいつさいを託すまえ——まだ執筆中から、西埜はこの作品を「電子のため、海野電子ただ一人を、現実に存在可能な読者として」書いていたのだと語ってくれたことがあります。私のこの証言を信じるかどうかは、皆さんの自由ですが……しかし、このことだけは皆さんも真剣に考えてみた方がいいと思います。それは——いいですから——西埜森夫に《禁作家》というおぞましい烙印を捺し、その作品にどんな種類の発表の場も与えないように仕向けた責任は、張本人の大日本文学芸術管理機構だけではなしに、あなたがたジャーナリストの一人一人すべてにあるということなのです。

私が彼に初めて出会ったのは、ちょうど彼の最初の著書とされている『吹雪星少年少女団』が、おそらくこれ以上はないというほどのささやかで慎ましい形で出版された二箇月ばかり

あとのことでした。それからしばらくして、彼は次の長篇小説と、ある小さな総合雑誌に発表していた数篇のエッセイがもとで《禁作家》の扱いを受け、いっさいの公的活動を封じられたんです（皆さんもすでによく御存知のとおり、この《禁作家》の措置というのは、なんの表だった告知もないまま、あるとき突然、決定がくだされ——するとたちまち、つねに世間の眼に最も触れにくい形で、着実に執行されてゆくものなんですな）。けれど、西埜と私の本当の結びつきは、《禁作家》とされた彼の三十歳以後にますます強まっていったような気がします。

私がその間近に、ともにいたあいだ終始——西埜は極度に貧しく、しばしば健康状態は悪化し、そして社会による冷遇、黙殺といった事実以上に……そんなことを気にかけている暇もないほど——そもそも彼に小説を書かせるにいたった、その動機の根源に位置するさまざまな苦しみに苛まれつづけていました。一度も……そう、一日はおろか、ほんの十分間たりとも——西埜がそれらの苦しみから解放されることはなかったんです。

……ええ。西埜を責め苛んだそれらの苦しみの一つに、私の存在がある意味で深くかわわっていたかもしれない可能性についてなら、私は否定するつもりはありません。しかし……私もまた、苦しんだのです。彼とまったく同じに、私自身がその事柄にどれほど悩み苦しんだかは——ほかならぬ西埜自身が、誰よりもよく知っていてくれたでしょう。そして、私たちのその苦しみというのが——あなたがたの想像されるような性質の問題によるものだった